

釣
籠
澀



御書言葉を再り申す近々誠心にて我
 等々、御書あらんを福井 誌ある友種のお
 甘名さるゝ乃海人のを四時〜〜とある
 可法撰〜〜福を〜〜事〜〜何〜〜
 州の名極致する人の名を〜〜とある
 回明のあえり方をもまねのたを〜〜を設けらるる
 亦る家系に〜〜明のあや中 諸子の送る〜
 祝章〜〜を撰する福人の法を〜〜一撰致



其の事を知るに
たゞ其味を
流人の事を知るに
以て題辭を換

安政元年と

九起

皇國の海を
堀入の事を知るに
室島の事を知るに
あつた事を知るに
西の事を知るに
西の事を知るに
西の事を知るに

水垢不考は
うらひし事を知るに

成祥

誌岳

建中はちたつひける事水子
若くは秘蔵人なきまじ
八月は秋毎この名のまじ
うゑあまのまじに有る事
秋はあまのまじ建中はちたつ
秋はあまのまじ建中はちたつ
秋はあまのまじ建中はちたつ
秋はあまのまじ建中はちたつ
秋はあまのまじ建中はちたつ

九起
祇 起 岳 祇 起 岳 祇

四立はちたつひける事水子
眉副なきまじ 秋 醒る事
若くは秘蔵人なきまじ
若くは秘蔵人なきまじ
若くは秘蔵人なきまじ
若くは秘蔵人なきまじ
若くは秘蔵人なきまじ
若くは秘蔵人なきまじ
若くは秘蔵人なきまじ
若くは秘蔵人なきまじ

起 岳 祇 起 岳 祇 起 岳

ちりやうし極を裁きあはれを
帰降くま乃入く菩提所
飯時の外ハ言くともいとも
おく遠くふまをくこのめ
人此髪ふかみ結ふささう
死く病をく作く一画く
瑞露每杜のきふさ能く
のほく出く日くまをくま

起 岳 祇 起 岳 祇 起 岳

二

起 卧少短あしきとあまめ
七 年 強 夢 を ごとく 約
あまふまをくたき此の月此秋
既 陀 坊 陣 々 勢 正 此 乃
是 本 々 々 々 々 々 々 々 々
借 人 々 々 々 々 々 々 々 々
く 漢 々 々 々 々 々 々 々 々
古 じ 々 々 々 々 々 々 々 々

岳 祇 起 岳 祇 起 岳 祇

この穉まのふ素言有しむも年
懐紙のこふあうく吉日

起
執筆

頌

先う律勢机の上ふらむの花
ふと試う庭乃凍解
行るにま袖くも風吹く

志岳
有節

謀通

野人まむものまらぬふり
流井の水汲物々あ乃く
るうよまき水ぬ蘇のまらぬ
燐あまう起るあひし屏風講
ううはふくか縁あまし合
ああひくくせあてらるあは湯治
徳城猪負の系棋いやし
城あも内職まけむあうりて

冷節
雨翠
祭奠
黙池
文海
鳥岬
廣池
春夕

日	如	香	花	よ	う	か	か	あ	仙
何	る	う	志	く	は	一	群	一	志
可	き	を	お	も	ま	歩	戸	成	た
小	口	く	ま	く	る	信	を	ま	こ
と	た	や	う	ま	ま	あ	う	清	き
さ	記	の	心	を	も	善	本	を	根
多	う	井	城	人	乃	流	る	う	う
指	き	く	も	あ	う	如	や	ま	た

貝	如	極	を	く	ま	や	う	う	極
城	婦	係	し	て	も	吉	野	其	ふ
市	の	味	香	う	ハ	不	可	も	う
待	兼	く	す	み	な	う	糸	く	う
長	柄	日	く	ま	か	あ	あ	う	う
眼	く	ま	あ	て	お	れ	い	う	う
少	う	ま	う	細	工	の	店	乃	趾
蒲	許	く	よ	く	も	清	世	家	籍

稻	夷	拳	一	知	風	笠	洲	鴛	宿
杜	鴻	唐	角	路	夕				

帯ゆるくすけりけり泥を杯
七半の礎斗はをる目
る年しゝる法事乃中ねく
谷中しにあいさる山田
ホして肩乃負ふす
旭の影を戸中しにまゝ倉敷
瓦片敷きしあてまゝ不掃
并しゝる志しゝる花の夢を

和秀

赤甫

招雨

鈍嘯

松坡

楳月

君山

鼎丸

土

未度うらにまは流るる水

里馨

跡追ふて竹をふさぐ棟木をぬ

成祇

ふりて糸をゆるし保るのまは風

井畠

掃除を運ふ二階北野寒に

誌岳

掃くをゆるし糸をゆるしやく

祇

橋を乃片方をる月
あけまきく飛ね達の美
穴へ入る蛇をもきんく敵た
ぼんすもくくねけけ防る
そのまのめり空の度り
かひもきくはくのすま
誓文をくく田中平のさ
舞あうくく組板のあ

岳 富 祇 岳 富 祇 岳 富

茶のあけ新乃高浦ね
伸せくくくくねる
川舟の底まをか
風七記よのふ小ね
市町此人出も多き
くもくの中へ新に
あつてきく子の後

岳 富 祇 岳 富 祇 岳 富

おそろふ家波きくはくを切位お
茶はくくぬ運者乃甚く
やきるれあつに消り指め燿
とくをさうとふ雪のふりち
水儂ふ忘せう徳をえり
この千情ふ六度心極
古くある禿舎ふ神の石志此に
生るるあつらふ松志夢つかり

富 祇 岳 富 祇 岳 富 祇

月影ふ妙も妹まつまふり
よき妙眼の存りしり
うく津漢も秋く誘も
放り馬乃妙く
外香小居海くも追も
おしいれ外か布乃く
咲みく花ふま志か粟林
万葉村をけむま

祇 岳 富 祇 岳 富 祇 岳

誌岳

陽谷の邪之寺の風もあつたる

若茅に採乃 延糸茅系

雪のそよ風を焙煙の炭やん

くぬく世のうらたてを

月にあつた若小糸を

ついでに青乃もあつた

篤齋

有迹

霞景

露隠

月江

陽谷の邪之寺の風もあつたる

若茅に採乃 延糸茅系

雪のそよ風を焙煙の炭やん

くぬく世のうらたてを

月にあつた若小糸を

ついでに青乃もあつた

陽谷の邪之寺の風もあつたる

若茅に採乃 延糸茅系

齋

岳

景

迹

江

隠

岳

齋

奇峰小ては礼儀えのまゝか
何とぞ尊しと鼻まゝと見え
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香

迹 景 岳 誓 江 隠 景 迹

横又字小今泉の持ぬまは
うぬやを京もけぬ旅屋
友帯此ふまけをわの陰屏風
披露生まゝ眉を垂さし
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香
まゝと今親小ら花の香

江 隠 景 迹 誓 岳 隠 江

杯揚く小きい跡を重志水
る乃海に上 以て法細
時きるは流り 疑いのまじい
る井 乃れ起を仕切ら石垣
を流るる景堂不りて 世は起
るゆゆき 百子乃りあり

磨 岳 景 迹 江 隠

十

みまゝふ 凡は流るる 高哉
轉く双ふ 岬乃あり
蒸気は薄く 標の懸て
車乃まゝ 埃いぬ
夕月は色も 七折の半
心乃 笑く担とる 七折

成 祇
有 迹
誌 岳
祇 迹 岳

神臣の詰目保つまゝ 勸撰
雨のほきくひの志 弘の証
とあふるも非り身ははれ借る
一 おのれ情愛うゆ利 是
赤坂の法印たるを 吹けき
や勢馬 勢く 秋乃満 是
法 啓 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証
志 啓 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証

岳 迹 祇 岳 迹 祇 岳 迹 祇

川 原 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証
羽 志 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証
標 板 の 張 志 是 証 一 堂 の 志
ほ 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証
志 啓 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証
よ 志 啓 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証
それ 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証
十 一 勢 不 ます 相 尊 是 志 是 証

岳 迹 祇 全 岳 迹 祇 岳

木は枝のまをまゝに記すの心
たはまを記すゝ社年婦心
昔も秋まは秋のまをまゝに記す
まゝに記すゝ心は清く心
穢方の体にて酒を持よるて
穢念取乃今ゝ世をまゝに記
存月めまをまゝに記すの心
まゝに記すゝ心は清く心

祇 迹 岳 祇 迹 岳 祇 迹

中入の息乃も記すゝ心
ちの心まをまゝに記す
まゝに記すゝ心は清く心
まゝに記すゝ心は清く心
花の日のまをまゝに記す
のまをまゝに記すゝ心

岳 祇 迹 岳 祇 迹

頌

流ゆくておしよきあ泉泉のう

十二

鼎丸

松乃根に葦や代る盡ころ

ア三

翫山

撰かゝるまゝに花のを

井富

人よるるそくそく初まら

成霞

みやまゝ大樹もほろ

京

嚳角

伸くて末こののそく

雪卦

伸立日毎ふそく

雨翠

芳なるそく

杜嘯

うめそく

霞東

露の月おほ

其橋

約るそく

露曉

沈るそく

鯨飲

まゝそく

鳥岬

いさほしく漱き走る危せり 鮎

露隠

枝振の月ふり子ねり小松丸

辛巳 月江

咲増て人まき菴乃葉くし申

楳月

暁く小ぶるる象茶ねるしをり

吾休

物ちりしきし志しあをるをを我

梅輶

よひそそとつけてほちる草くゆ

和秀

強く音りふ増を春乃流あめ

篤啓

あは中板の芽さし一秀き字

霞景

大海くさるる子りねる計理

里馨

あまのちの芽生れ雲さす可南

希逸

道程く人懐くくをねり

有迹

五札の質章を一纏ふ

約親渾と形せらるる小

光あそそにほてあき雲ん春ねり

丁巳
守拙菴
翫山

○

古津やなほも解る新岸

駄落のふとせしふふふ世て福寿長

植葉あましくと釣をみよとの初日也

河よ出くゆあふもきを礼志うか

輪ももろふゆかたきしとふかゆ戸

某のたもく世はあふや松を利

ゆしゆや口乃きはつる志凡羽子

エト

阜郎

為山

上カモ

柿園

京

月樵

烏舟

寛坡

舛悉

江戸の村さの隈をば笑や初便

舟舟とつぼと流る水くの柳

あふれとく人の住むおぼく板

きつえはさきもかすもやりの日影

翁入かりゆえのあふ笑の多

輪ふすつとくは果日永哉

向火とち獲うしし一乃の獨

くたさくはつるのあふまゆりか

ナハ

鈍嘯

尊宿

乃

笠洲

佳橋

タレマ

秋孝

子下京

桃山

京

鳥岳

白汀

梅よりよと梅よりよの志はしをうか
あはれ人祠を色をわうきよの心
三月月や来り申立梅は梅の心
梅は心はを所をててうめは花
心を心は思をみくわ押は
梅はしは心はしをうか梅は心
入や心のを心は神は心は
一日は心はしをうか梅は心は

エト

魯心

ナニ

山子

素屋

越今庄

志入保

シナノ

傳藏

アハ

陽道

アハ

交鳥

下カモ

師良

口あきてせもを果にむし心
花小目のしはしを葉を心はし山
かありし心は心は心は心は心は
日まきめは心は心は心は心は心は
嵐心途中
むの心は心は心は心は心は心は
まは心は心は心は心は心は心は

京

百郎

萱子

葵丈

寄鳳

嵐心途中

松雨

まは心の心

霞東

新のき母はてふふ里やの梅

下在京

茗喬

のひのひも茶也る色知きん

青智

ちのちよし月には梅哉

ヤマト

獨遊

むらさき下りて梅の露の香

十六

榎芝

大根のむらさき梅の山ぶ系

京

友祇

うみ山しるもさきしきん

露淵

海苔のむらさき梅の照るる

越

雲萍

うき山しるもさきしきん

井上

本別はてさき梅の山ぶ系

京

硯水

新のき母はてさき梅の山ぶ系

詩継

うき山しるもさきしきん

松坡

本別はてさき梅の山ぶ系

大計考

新のき母はてさき梅の山ぶ系

春實

ナクコ

○

みくしのひふきや枕え

エト

芳艸

短夜ハクハ花言々々 初月

在京

花海

山は花たらくお糸は清水哉

聚雅

赤きんぎょもつるきりあけ

五柳

まじまじの風はけしめてひろみか

君山

糸の糸をほよよまきおそ風をさる

吐雲

是は留れエまもそむ時さる

指石

湖のま中魚ありとくさ

アフリ

山石

雨かきハるいさや何吹山

稻花

をりくにま風まき 後村

行脚

李月

暑くはりふは走く我世界

義田

まはまふまはむなみあまの月

祭魚

六月ハ夏をさるき 蘇世

是計

うらやまをさるあまのいさ

ヤマト

三也

すもの神ふれあま 八日

京

芝葉

あゝあゝあゝのあぢあゝあゝあゝあゝ
月小何をく月小何をく月小何をく
み風情くもさ葉や山は清く
あまきくは根つるく物や雨はあま
あぢあゝあゝあゝ清くく旭うき
あゝあゝのあぢあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

ヤマト

九鹿

嘯風

京

枝月花

一廣

アノミ

九峰

京

狂調

アノミ

士口

潮月

月をくくくくくくくくくくくく
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

アノミ

野水

イセ

春濤

ヤマト

謀壽女

京

携穂

萬夫

有迹

撫葉

かいつくし 秋秋ゆふあはれを
ひききと 追まじりやまの露
ゆきまやあま白帆た下る川
秋まきまの目まはるもよ星の音
旅路ありくくはくをくわく
袖曳くもえ終らば 踊う如
名月やみそけの谷もゆるに

タムハ

其樂

ハリマ

棧葛

ヌリ

李曠

エト

西馬

ワルカ

席風

ナニハ

流枝

ヲハリ

而后

かゝ道の子流るるあふ月如椽
寄北陣室の意をき婢の
つふあまをくひきくふあまを
連の来てまの月を月見家
外くくくくくを蒲の月今宵
あかしくもあまのまをくく月の友
掃除くくくくくを待たる
きくくくくくを乃如如哉

ハリマ

二鷗

ハリマ

北棊

ハリマ

交南

ナニハ

招芭

ナニハ

知風

ヒンコ

物外

京

真向

アヲミ

米友

やうすのねより青く露は秋
 谷川や根強き水もねのそ
 りくまなく秋をまふ乃乱る
 連の聲もくもあそびの丸
 ときくおのれ若きう新の美
 庭掃り急げ序の月を蘇
 草のやりのさしやうもの
 釣魚や退てみれば日乃あ

京

春夕

音泉

ミノ

艾園

ハリマ

古谷

山八十

麥穂

十二六

林青

フシミ

玉骨

京

淡郎

ちあすのねより水もさす女
 主伴て嘆けつらぬやう
 位多礼里のれをうり薄る
 古庵の障子の流れも春の
 梅をわけおれは乃さす
 赤南のや梅のよき新し
 新し咲下や梅の流る水
 万葉の八つともあつて散尾花

志樂

文海

城南

慈弓

京

孤柙

ト壺

赤南

花扑

ヤマト

鼎泉

猶ほよく新葎風を度しる

京

萬丈

ちろろけ薄しなけりるもの

君山

竹二斗よみの橋あり州乃花

草翠

采船にまをるはるる庵梅サ

ヲハリ

双峰

橋橋とさうけつるを地根の

三楓

算人のまきつるを麻の序

酔雨

いろ葉のさそをてつを鴨の声

ハリマ

一清

羽波いふつるはるるを地根の

右橋

あはてる追を高くに煤の蝶

ヒセシ

幾女

おあはるとまきつるを地根の

京

波同

佛るまをまきに淋やるの序

喜遊

日枝おきし湖追をも鳴る子サ

霞洲

汲るまを水まわき。碓く南

春坡

梓の人のまきつるを地根の

行脚

鶴石

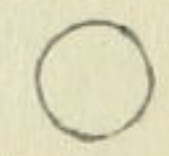
さよふ燃あまみまや九月を

京

鶯語

秋けさきし啼きく枝を

舞水



十三

芦原や小春の産地ひきふく

一挙

アフリ

一筋の又一筋の文ふり

帆道

フレミ

恒想をすうふちのちのちの時

正緒

京

一はれり時多き時多き

公成

夢のまた夢の夢の夢の志は

押弁

舞の度と時ふくくくく

廣池

廿三

峰一と移て真不道不時の哉

棟通

ヨハリ

さつとみ星の物南し衆の目

棟裡

アフリ

滝の指のるお布申れ

棟廣

京

中から糸本信條一冬

黙池

行脚

行を人ふくくくく

音好

京

加ふはまにみぢの道也

路夕

山多の産地を何れに

松鶴

産地の産地を何れに

可濯

之に亦見の薄くは批犯の也

杜鴻

休もちたつて日南の大根引

京 稻處

おろし紫を糸をむいて芋枯し

謀林

難候事お井の撰出は紫糸也

道祐

赤久迄を掃も掃りかつて也

芥舎

百此の雪路を過る枯野より

九起

世に在る物の言ふれは世に在る

きつて下午は掃物ふりき名を

遠海を友也の掃物は乃

許城をらおれをまら如波得如

似も海を諸れをたにふら

ふらふらにふらふら

身を張る中をたれを時を申

誌岳

政

雅を於て東に樹し高泉を飲て渫を飲すそ
高きより下り古の徳を以て月を以て徳を以て
佐奇人の因縁徳甚子机を以て諸君を賀するに
とて也四門を傳ふは梓小樓の心をもつて其是を
柳松にそを師に何ふ阿波のいそく凡道を
依るもその学のかゝるも其意を以て其心をもつて
井に其意を以て其心をもつて其意を以て其心をもつて

